

Miku la Chic

タイスの瞑想曲

MEDITATION from the Opera 'Thais'

Op.1

作曲 ジュール・マスネ
Jules Massenet 1842-1912

— 創作日本語歌詞による —
2021年11月7日 β3版

— 令和三年八月二十三日 夜半 逍遙するに 朱雀に流れ星を見て 詠める —

ららら……るるる

はる
遥かな空 旅する流れ星

かけ
翳る光 ひとつ

ちっちゃな石ころカプセル

あした 晴れるのかな……

ヒュルル、、 ザザザ、、

風が吹く 雨が打つ

なみだ 拭いて……キラキラ綺羅綺羅

すざく
朱雀渡る この闇を裂き

あまて
天照らす 銀河の果て

ぼくは 子守唄をあげる

ららら……るるる

◎制作ノート

人目を避け、夜中にうつむき加減で歩くことが多くなったある日、流れ星を見た。南の空に向けて、たった一つの、はかなくも弱々しい朱い光が、さっと消えた。遥か遠くから飛んでくる小石ほどの破片に過ぎぬものが、たまたま居合わせた一人の人間の眼に、鮮やかな印象を残して消える。何億年もの間、いくつもの銀河に捕まらずにここに辿り着き、いまこの瞬間、最期を迎える光を見届けたのは、自分一人かも知れぬのに。飛んで飛んで飛び続け、八百万の宇宙を見たかも知れない、誰のためでもない、孤独なタイムカプセルが、いま姿を消した。

その日その日で頭がふさがり、何が手に出来るかだけに眩まされ、明日の空など気にもしなくなって何年だろうか。そんな孤独な人間も、上を向いて歩こうという気になる。不思議だ。明日空が晴れたら、この胸のうちに巣食う、底知れぬ闇も晴れるかも知れない。夜空に闇などない。心の闇をひらけば、頭のうえに無数の銀河が光っていることを信じられるのだろうか……ならば、このちっぽけな石ころにお礼をせねばなるまい。安らかな眠りを願い、その命の名残を感じたければ、念仏ではなくて、子守唄だろう。何も取らずに消えた流れ小星を送った親星に、かえし歌をあげてみよう。あげてなお幸せがあるという事を信じる、生まれたての心だって、届くかも知れない。

初出：令和三年十一月七日